性同一性障害を伴う境界性人格障害患者が自立していくための看護の視点
－感情のセルフコントロール力を高める関わりに焦点をあてて－

原邦子(応用看護学)

【キーワーズ】 性同一性障害，境界性人格障害患者，対象特性，感情のセルフコントロール，自立

本研究は、性同一性障害であり境界性人格障害と診断された患者が自己の感情をセルフコントロールできるようになり自分自身の力で自立しようとするまでの関わりに焦点をあて、その時の看護師の認識と言動の特徴を明らかにし看護実践上の視点を取り出す事を目的としている。

研究対象は、一事例に対する自己の看護過程である。

研究方法は、感情が乱れている患者を整え自立に繋がったと思われた看護場面を選定しプロセスレコードにおこし場面として再構成した。

分析方法は、研究素材から《対象の言動・状況》《看護師の認識と言動》《看護師の言動》《関わりの意味》となる分析フォーマットを作成し《看護師の認識と言動の特徴》を取り出した。更に、これらの共通性と相違性を比較検討し、以下のように看護の視点を導き出した。

1 患者のそれまでの言動の特徴をものさしにし、患者の感情を予測して乱れていることが見て取れた時は、患者が辛い気持ちを表出できる様に配慮し看護者と向き合える状態に整える。
2 患者がかかえる様々な問題や辛い思いを表出してきた時には、患者の存在の重要性を伝え、共に気持ちを共有していきたいという看護師の思いを伝える。
3 過去の良い記憶となっている人間関係の経験を思い起こすような話をすることで、他者の役にたっているとともに自己の大切さを認識できるように関わる。
4 患者の行動がセルフコントロールされていると判断した時には、その都度、患者のとった具体的な行動を客観視できるように表現し、患者が自己を気付いていけるように関わる。
5 周囲との交流ができる力があることや自分自身で意思決定できることに気付くような投げかけをする事で、患者のこれからのなりたい自己像を引き出すように関わる。
6 患者自身の性自認を強化するような言葉かけを行うとともに、自己の性自認と異なる性を感じさせないように配慮する。又、長期にわたるホルモン剤服用による身体の変調についても考慮し、精神科以外の受診の必要性を判断する。
7 患者が自己流でしか物事が考えられず、認識が乱れ冷静さに欠けた感情を表出してきた時には、看護師自身の失敗経験や患者の知らない社会の状況がある事を伝え患者の認識に変化をもたせるように関わる。
8 患者の自分本位な偏った考えや社会に認められない行動を指摘して、その事が患者にとっての乗り越えなくてはいけない問題点であることが自覚できるように関わる。